

働く人のためのキャリア・デザイン

金井壽宏 著

職業指導理論は、選択理論→適応理論→発達理論（キャリア）へと発展し、現在はニュー・キャリア理論が展開し、「キャリア」について多面的に研究されている。スーパー以来、「キャリア」について研究され続けているが、その研究は、職業生活者が人生における幸せを追求する最も基本的な分野であろう。

職業指導は、学校から社会への出口だけの指導ではなく、個々の人生における様々な発達を促す指導であり、生涯学習をベースに、自己理解と現実吟味をとおして社会および職業について学ぶ場である。人生の中で、家庭を持ち、子どもの養育費が増えるのはミドル世代である。そのため、若者に対して将来のミドル世代に向けたキャリア発達を促す職業指導が求められるのはその所以である。

本書は、2002年に発刊して現在も発売され続けているロングセラーである。著者の金井壽宏氏は、神戸大学で経営学を専門とし、なかでも人間の問題に深くかかわるトピックを主たる研究分野としている。

著者は、冒頭で「キャリアは、長い期間働くつもりがある限り、みんなの問題だ。」と述べ、「人生の節目（トランジション）の時だけは絶対に強く意識してデザインすべきものがキャリアだ。」と明言している。

「馬車の辿ってきた道程を示す轍（わだち）をキャリアに例え、その馬車の御者こそ、キャリアを歩む人だ。」と示すなど、全体的に若者に分かりやすい表現で述べられている。しかし、単なるハウツーものではなく、豊富な理論や資料による学問に裏付けされた内容の著書である。また、対象とする読者を就活する若者からミドル世代、シニア世代と幅広く置き展開している。

各章にはいくつかの自己チェックとしてのエクササイズを置き、現在の自己理解および将来の展望によるキャリア・デザインを考える機会を設けている。

前半は、エドガー・シャインの「キャリア・アンカー（錨）」、マイケル・アーサーの「バンダリーレス（境界なき）・キャリア」を紹介し、ニュー・キャリア理論を現実吟味しながらやさしく展開している。キャリア形成は、組織がリードする時代から、自由度が増した個人の選択と行為に求められつつあると言及する。

ウィリアム・ブリッジスの「トラジッション（節目）」で、節目は「終焉」→「中立圏」→「開始」の道程を経る。すなわち、キャリアは「終わり」から始まるため、前の節目をしっかりと終わらせることが次の節目につながると指摘し、職業生活における節目について論説する。

後半では、人生の最初の大きな節目（就職時と入社直後の適応）について述べる。

就活時のミスマッチや誇大な会社案内などに若者が惑わされないために、企業は入社前に現実をしっかりと踏まえた仕事の様を正確に就職応募者に伝えることが必要であるとして、近年の企業におけるこの動きも紹介する。

大きな節目であるミドル世代でのキャリア発達については次のように述べる。

「45歳を人生の正午とすると、それ以降では、生殖性や世代性という問題に直面する。その年代がミドル世代である。そこで元気なミドルと疲れたミドルの二極分化が始まる。」

終章で、これから元気よくキャリアを歩むために、夢を抱き、現実吟味し、必ず元気にアクションするために、「いいキャリアを歩むために考える材料」を紹介している。全体的に、理論に基づきながら人生論にも言及したキャリア・デザインを展開する。

(PHP新書, 305頁, 780円) (田中正一)